

内面化された「母」のイメージ

——*The House of Mirth* における自伝的要素¹⁾——

大野朝子*

A Study of the Image of “Mother” in Edith Wharton’s
The House of Mirth

OHNO Asako

In the latest biography of Edith Wharton, the author, Hermione Lee suggested that we could find the traces of Wharton’s personal life in the main character, Lily Birt. Also, in the past articles, several researchers pointed out the importance of mother in Wharton’s childhood and said that Lily’s childlike act and lack of communication skills seemed to come from her own experience with her family. To look at the past studies, Wharton’s mother, Lucretia Jones was always introduced as a sociable lady who regarded social rules in Old New York and didn’t pay much attention to her daughter. In her childhood, Wharton realized that the girls in her society had a certain role and the girl like her, who weighed heavily in literature, was almost an outcast. In both Wharton’s actual life and in the text of *The House of Mirth*, the image of mother had something oppressive and led the daughter to self-denial. In this study, I will examine how Wharton expresses her own conflict in the character of Lily in the light of her relationship with her mother by using the terms of psychoanalysis. As a conclusion, *The House of Mirth* plays an important role in Wharton’s life as a proof of “sublimation” she achieved by writing her own experience.

* 東北文化学園大学総合政策学部准教授

1) 本稿は日本英文学会第80回大会(2008年5月, 広島大学)での発表内容に大幅に加筆、修正したものである。

1 はじめに——自伝的要素をめぐる議論

イーディス・ウォートン (Edith Wharton, 1862-1937) の最新版の伝記のなかで、著者ハーマイオニ・リー (Hermione Lee) は *The House of Mirth* (1905) の主人公、リリー・バートをウォートンの「自伝的な」人物とみなすことについて、曖昧な態度を示している。彼女は自伝的な要素を否定しながらも、それと同時に、このテキストにはウォートン自身の、制止できない個人的な感情の強い表出がみられる、とも主張している (Lee [2007] p.203)。また、リーよりも30年前にウォートン伝を出版したシンシア・グリフィン・ウルフ (Cynthia Griffin Wolff) も、リリーとウォートンの同一視に躊躇しながらも、たとえば、子供のようなリリーの行動様式や、感情面での不安定さ、といった特徴に作者自身の姿を重ね合わせている (Wolff [1995] p.132)。

The House of Mirth の終結部はリリーが薬によって自らの命を絶つ場面で閉じられ、リリーの強い絶望と孤独感の究極の表現になっている。リリーの死は、不運や、社交界の人々の悪意によってもたらされたもので、その要因は複合的であるが、彼女は不可解なほど、すべてを自分の責任であると信じ込む。グロリア・C・アーリック (Gloria C. Erlich) が指摘するように、リリーは極度に内省的で、被害者意識が希薄であり、責任転嫁を不得手とするどころか、周囲からの援助があっても、決して素直に応じることができない²⁾。他者との安定した関係性の構築に困難を抱えているが、そこには作者の幼少期が反映されているように思われる。

ウォートンが経験したとみられる絶望と孤独の感情は、幼少期に端を発し、彼女自身の母親との不和に由来しているのではないだろうか。たとえば、フロイトの理論には、「取り入れ」(introjection) という概念があるが³⁾、*The House of Mirth* は、主人公リリーが「女性の」イメージを、母親を通じて外部

2) Erlich はリリーが、ガス・トレナーから性的関係を強要された後、被害者意識よりも、恥の意識に囚われ、自分自身を責め続けることについて、近親相姦の被害者のような反応だ、と指摘している (Erlich [1992] p.62)。

3) 『フェミニズムと精神分析事典』において、「取り入れ」は以下のように定義されている：「取り入れは投影の過程とは正反対の過程を記述する、それは幻想における主体が〈外部の〉世界から対象を〈自分自身の中に取り込み〉、その結果、それらの対象を自己の〈内部に〉保存する仕方を指し示すものである」(ライト [2002] pp.279-280)。

から無批判に「取り入れ」た場合の失敗例として読むことができる。実母から強制的に刷り込まれた「女性らしさ」がウォートンを抑圧し、さまざまな葛藤をもたらしたことは、のちに引用するように、伝記に示されている。

これまで、ウォートンの伝記的事実と、作品への影響について、たとえばエリー・ラグランド・サリヴァン (Ellie Ragland Sullivan) は、精神分析理論を応用しつつ、「*The House of Mirth* は神経症的な苦しみ (neurotic suffering) を芸術の領域まで昇華させた例と解釈できる」と指摘している (Sullivan [1994] pp.465-468)。サリヴァンがここで重視するのは、「芸術家」と「女性としての生き方」の両立を認めなかった、ウォートンの実母の影響である。さらに、アーリックは *The Sexual Education of Edith Wharton* でウォートンの子供時代の母親への憧れと憎しみが作者の自我の形成に与えた影響を重視し、ウォートンの体験した孤独感は成人した後も解消されなかったと主張している (Erllich [1992] pp.16-49)。

このように、ウォートンの伝記的背景と作品の関係については、すでに多くの先行研究があるが、リリー・バートの描写に現れた分裂する自己のイメージや強い不安、依存心の強さと母のイメージの取り込みとの関連性、実母の影響については十分に分析されているとはいえない。

本稿では、心理療法家のアリス・ミラー (Ailice Miller)、エリザベス・ライト (Elizabeth Wright) の編集による『フェミニズムと精神分析事典』の用語を援用しながら、ウォートンが無意識的に抑圧していた少女時代の葛藤が、リリーの心情として現れていることを、伝記的な背景の検証によって明らかにしたい。

2 “Life and I” とウォートンの母ルクレシア

ウォートンの実母、ルクレシア・ジョーンズを、伝記や自伝、未出版の回想録から探ると、そこには、娘の個性を認めず、慣習への盲従を強制し、徹底的に文学に無理解な母親像が浮かび上がってくる。ウォートンは、回想録 *A Backward Glance* (1933) において、母親との不和について言及を避けているようだが、母親への強い不満は、父親をめぐるエピソードに隠されている。そこには、ウォートンの父親が、妻ルクレシアが文化、芸術に無関心であるこ

とを苦痛に感じ、文学の趣味を断念したという挿話が紹介されているが、父親への同情は、実母の教育に対するウォートン自身の反発心の表れであると考えられる。さらに、回想録は、母親が娘の読書への執着に困惑し、読み物を逐一検閲するようになったこと、11歳のときの処女作に対する母親の反応が冷淡であったこと、など、実母の非協力的な姿勢を伝えている。しかし、アーリックはこのような *A Backward Glance* の回想を以下のように分析する：

In “Life and I,” an earlier and more candid manuscript version of her memoir, she reveals that she had felt neither cradled nor safe. For her, childhood was a series of terrors. She was worried, frightened, and subject to terrifying fears and compulsions. She suffered from wide emotional swings ranging from helplessness to grandiosity, felt divided between incompatible public and private selves, and was driven to extravagant and sometimes socially unacceptable activities. (Erllich [1992] p.19)

(より早い時期に書かれた、より率直な回顧録 “Life and I” のなかで、ウォートンは自分が手厚く養育されたわけではなく安全でもなかったことを明らかにした。彼女にとって子供時代とは恐怖の連続だった。彼女は心配し、おびえていた。そしてひどい恐怖心と衝動に心を支配されていた。彼女は自分の感情が無力感から尊大な態度までの間を揺れ動くのを感じ、公のものと私的なものに自己が分裂する矛盾を感じていて、大げさな振る舞いに出たり、社会的に容認されないような行動に出たりすることがあった。)

キャンディス・ウェイド (Candice Waid) が引用した “Life and I” (未公開のウォートンの回顧録) の以下の部分には、ルクレシアが娘に対して過剰に支配的であり、また、それに対し、ウォートンが敏感に反応していたことが描かれている。

For years afterward I was never free from the oppressive sense that I had two absolutely inscrutable beings to please – God and my mother

- who while ostensibly upholding the same principles of behaviour, differed totally as to their application. And my mother was the most inscrutable of the two. (Waid [1991] p.10)

(私は何年もの間、ふたつの絶対的に不可解な存在を喜ばせなければいけない、という心理的なプレッシャーから自由になれなかった。それは神と母である。彼等は行動に関して表面上は同じ原則を支持していたが、適応においては全く違っていた。そして私の母がもっとも不可解だった。)

この部分には、ウォートンが母親の機嫌を伺い、満足させるために懸命に努力をしていたことが表れている。ルクレシアは娘に上流階級の行動様式を強要しただけでなく、子供の気持ちに寄り添うことのない厳格で自己中心的な態度で接していた。結果として、ウォートンは幼少期より自分自身の欲求を押し殺せざるを得なかった。こうして彼女は常に「抑制されている感覚」(oppressive sense)を意識下に抱くようになったのである。

ミラーによると、情動上不安定な母親の子供は、他の人間の発する無意識の欲求信号に敏感に反応する感覚を作り上げるといふ。さらに、子供はありのままの存在として尊重され、向き合ってもらうことを求めている、つまり感情、知覚、その表現が受容されることを要求するものであるが、もしも子供の感情が尊重され、受け入れられなければ、母親との共生状態から脱出できず自立できない(ミラー [1996] p.12)。のちに詳しく検討するが、「他の人間の発する、無意識の欲求信号に、敏感に反応する感覚」は、リリーの性質のなかに現れている。

3 内面化されたルクレシアの心像

このような、〈支配する母親と自己抑制を強いられる娘〉の関係は、ウォートン研究者によってすでに何度も取り上げられ、図式として定着している。たとえば、アーリックは幼少期のウォートンは乳母のドイリーに実母のような愛情を感じていたために、ルクレシアに対し罪悪感をもっていた、と仮定した後に、次のように説明している：

Having hypostatized the rejected mother into a hostile force, a vengeful Fury, Edith consumed considerable energy in efforts at appeasement. (Erich [1992] p.25, 下線部筆者)

(自分が拒否した母親を敵対する力, 復讐の女神として実体化したイーデイスはそれを鎮めるために相当のエネルギーを注いだ。)

The persecuting image of Edith's mother as judgmental, forbidding, aloof yet omnipresent, may have been a projection of the child's need for punishment rather than an accurate description. (Erich [1992] p.25)
(イーデイスが感じていた娘を悩ませる母親のイメージは、判断を下し、禁止をし、冷淡で、かつ偏在する、というもので、母親の正確な描写というよりは、罰してほしいという子供の欲求を投影したものだったかもしれない。)

キャシー・A・フェドルコ (Kathy A. Fedorko) は、「抑圧的な母親は娘の想像の産物に過ぎない、したがってウォートンの自伝を事実と受け取ってはならない」と断りながらも、実母の影響力の強さを見出し、ルクレシアの特質が「支配、厳格さ、自己中心的態度」にあったために、ウォートンの意識のなかに否定的な印象を残したことを認めている。さらに、フェドルコは、“Life and I”を参照し、幼少期にウォートンは彼女が内面化した母によって植え付けられた「最も耐え難いモラルの拷問」に悩んでいた、とも指摘している (Fedorko [1995] p.3)。そして、先述のリーもまた、ウォートンの作品には、狭量な母親によって抑制された、繊細で才能のある子供が繰り返し登場する、と述べている⁴⁾。

このように、ウォートンの子供時代にみられる支配的な母親と、服従する娘という図式は先行研究において定着しているが、*The House of Mirth* でリーを通して体现される自己の分裂や、恐怖心と、ウォートン自身の体験の関係についてはまだ十分に説明されているとはいえない。次に、ウォート

4) Lee は、ウォートンの母子関係の確執について、“(…) how much she blames her mother. Wharton's version of Lucretia Jones is one of the most lethal acts of revenge ever taken by a writing daughter.”とまで言い切っている (Lee [2007] p.34)。

ンの実体験としての抑圧が具体的にどのようなものであり、どのようにリリーに体现されているかを、行動の監視役としての母の役割と、娘の感情の抑圧とその効果に注目することによって明らかにしたい。

4 「娘」の自己抑制

サリヴァンは、「リリーは自分の評価を他人に任せていて、個人的感情を抑圧しているため、心が麻痺している。ゆえに自分の欲望を受け入れることができない」と述べているが (Sullivan [1994] p.469)、感情を抑えることは、ニューヨーク上流社会のマナーであり、ウォートン自身が母親から強要された行為だった。ウルフは、当時のウォートンが属していた文化では、社会的階級の高い若い女性が“feeling”を持つことは禁止事項であった、と述べている。

For many years, Edith Wharton's sense of her own feminine identity was in thrall to Lucretia, and for all these years, the artist was imprisoned too. [...] There were several things that “nice” girls were not supposed to do: one of them was to have feelings. (Wolff [1995] p.35)
(何年もの間、イーディス・ウォートンにとって、女性としての同一性の感覚はルクレシアに縛られていた。そしてその間、芸術家としての感覚も閉じ込められてしまった。育ちのよい若い女性がしてはいけないことがいくつかあったが、そのひとつは感情をもつことだった。)

ルクレシアは上流階級の慣習を尊重し、保持することを娘に強要した。ルイーゼ・アイケンバウム (Luise Eichenbaum) とスージー・オーバック (Susie Orbach) は、*Understanding Women* のなかで、女性是一般に、自分を判定し、縛り、そそのかし、失望させる母親を自分のなかに住ませる、と述べているが、ウォートンが内面化したルクレシアは、全知全能の恐るべき姿をもち、あまりにも厳格で冷酷であった (Eichenbaum and Orbach [1982] pp.36-67)。このような女性像は、ときに「ファリックマザー」と呼ばれ、娘に自立と自己への同一化を促すといわれるが⁵⁾、ウォートンとルクレシアの母娘関係においては、互いの精神的自立が困難であったことが想像される。

ミラーは、養育者によって十分なケアが与えられなかった子供は、子供のときの不満や悲しみといった感情を否認する場合があります、そのときに「仮想的、かのように風人格」あるいは「偽りの自己」ができあがる、と述べている。さらに、ミラーによれば、そのような子供は自分に望まれているものだけを見せようとする態度を発達させ、真の自己を発達させることができない。そしてそのような心の傷は一生癒えることはなく、親元での孤独のあとに自身のなかでの孤立が続く（ミラー [1996] p.18）。

ウォートンは、*A Backward Glance* のなかで、1899年に、37歳で初の短編集、*The Great Inclination* を出版するまで、「自分には本当のパーソナリティというものがあった」と語っている。そして、作家としての地位が安定し、念願の別荘の“The Mount”獲得後は、「作家としての自分を認識するようになってから、私の人生は変わった」と述べている（Wharton [1998] p.125）。

アーリックは、ウォートンには自分に課した良心の咎め（self-imposed moral scruples）で自分を追い詰める傾向がある、と述べ、ウォートン作品のなかで、感情を抑圧する人物の典型として *The Age of Innocence* (1920) のニューランド・アーチャーを例に挙げている。アーリックによると、アーチャーは過剰に感情を抑圧しているため、自分の望むことを把握できず、迷いが生じると、社会の慣習に自分の保護を見出そうとする。さらに、彼の誇張された慣習への執着は、彼を閉じ込めるルールの収容所（prison house）を作っているという⁶⁾。ウォートンが1898年に原因不明の神経衰弱で体調不良に陥り、フィラデルフィアで特別な治療を受けていることから、抑圧によるストレスの大きさが推測できる（Lee [2007] p.161）。

5 抑制がもたらす自己の分裂

The House of Mirth には、リリーがたびたび自我の分裂を感じる場面の描

5) 『フェミニズムと精神分析事典』では、「全能的で絶対的な力をもった性的に中立な人物像」と説明されている。また、この母親像は精神病の迫害的なイメージの基礎となりうる、という（ライト [2002] pp.311-313）。

6) Erlich は “His (Archer’s) own exaggerated conventionalism created the prison house of rules that hemmed him in. In this he was very much like the young Edith Wharton who tortured herself with extreme and self-imposed moral scruples” と述べている（Erlich [1992] p. 49）。

写があり、ウォートンの無意識の一部が反映されている。たとえば、社交界の人間関係において、リリーは常に他者の目を意識し、自分に望まれている部分だけを露呈しようとするが、一方では、そのような自分の行動様式に対し、苛立ちを隠せない。

She had been long enough in bondage to other people's pleasure to be considerate of those who depended on hers, and in her bitter moods it sometimes struck her that she and her maid were in the same position, except that the latter received her wages more regularly. (Wharton [1990] p.24)

(彼女に頼る人たちに気遣いながら、彼女は長いこと、その人たちの快樂に振り回されてきた。苦々しい気持ちで、時々、自分とメイドは同じ立場にいる、と思った。違うのは、メイドの方が、もっと定期的に給料を受け取っているということだ。)

この場面でリリーは、他人の要求に合わせ、〈偽りの自己〉を演じることを虚しく感じ、自己嫌悪に陥っている。リリーが本心を晒すことのできる唯一の相手はローレンス・セルデンであるが、リリーはセルデンとの会話の場面において、客観的な自分の姿と向き合い、現実を突きつけられることを極端に恐れている。

There were in her at the moment two beings, one drawing deep breaths of freedom and exhilaration, the other gasping for air in a little black prison-house of fears. (Wharton [1990] p.52, 下線部筆者)

(このとき、彼女の中には二つの存在があった。一つは、自由と高揚した気分を深呼吸していて、もう一つは恐怖心の小さな暗闇の牢獄で空気を求めて喘いでいる。)

この場面は、リリーがトレナー家の別荘近辺の牧草地でセルデンと寛いでいる場面だが、自然のなかで自由を満喫しながらも、完全に開放感を味わうことができず、「恐怖で出来た小さな黒い家(a little black prison-house of

fears) に閉じ込められている気分」を味わっている。リリーは自分の感情を読み取り、意のままに振る舞うことができない。自由を希求しながらも、開放感を体得できないどころか、本心と向き合う段階に至ると、恐怖心に囚われししまう。

『フェミニズムと精神分析事典』において、母娘関係 (mother-daughter relationship) の特徴は以下のように説明されている：「女性は無意識のレベルで母から分離することに失敗しがちであり、自己同一性のはっきりした感覚を発達させることができない。そして互いに溶け込み、あるいは混在しあう関係になる」(ライト [2002] p.294-298)。

ウォートン自身の母親への強い依存心については、ウルフが “Life and I” の挿話を紹介している。

Her childhood had been punctured by phobias: during her adolescence, the prohibition against “doing” was so comprehensive that the girl had stood literally frozen with dread upon the threshold of her mother’s house. (Wolff [1995] p.xvi)

(ウォートンは子供時代、恐怖症に悩んでいた。そして思春期を迎えても、ふるまいに対する禁止事項があまりにも徹底していたために、母の家のドアに文字通り釘付けになってしまった。)

ウルフは、母親の制御不能の場所にいる、という感覚が、強い危機感をもたらしたのではないかと分析しているが、このことはウォートンが、母親からの独立を希望しつつも、依存状態から脱することが困難であるために、ジレンマを抱えていたことを示している。精神的に自立不能な娘の心境は、*The House of Mirth* のなかではリリーとセルデンの心理的な距離にもみることができる。リリーはセルデンの語る言葉に共感しながらも、セルデンが提示する精神の自由に違和感を覚える。たとえば、「魂の共和国」(the public of the spirit) をめぐる会話の場面で、セルデンはリリーに人生において成功とは「魂の共和国のようなものを保持すること」で、金銭、貧乏、安楽、心配などのあらゆる物質的な災難から解放されることが本当の自由で、成功は個人の自由を成し遂げることである、と語る (Wharton [1990] p.55)。

リリーはセルデンの思想に本心では賛同しながら、是認することができない。裕福な結婚相手を見つけることと、精神の自由という、相反する生き方の選択を迫られているが、先の引用部分のように、リリーのなかのもう一人の自分が、「空気を求めて喘いで」いて、思考停止状態に陥っている。

さらに、活人画の場面の後、リリーはセルデンへの愛を痛感しながらも、現実の容認を拒否し、彼の元を去るが、リリーの行動と言動の矛盾は、キャリー・フィッシャーが「リリーは心の底では自分が手に入れようとしているものを軽蔑している」と説明している通りである(Wharton [1990] p.147)。リリーは表面的には母親から受け継いだ価値観を継承しようとしているが、物質主義で満たされた軽佻浮薄な社交界に対し、「軽蔑」を隠し切れない。

6 復讐の女神の象徴

先に、ルクレシアが幼少期のウォートンにとっては「復讐の女神」(vengeful Fury)に喩えられる存在であった、というアーリックの指摘を取り上げたが、内面化した母親に常に行動を監視されている感覚は、テキスト中で、リリーがギリシア神話の復讐の女神(Furies)の存在を意識し、恐怖を感じる場面に表現されている。

Book Iの終結部で、リリーはガス・トレナーから脅迫を受けるが、恐怖を感じたリリーは、復讐の女神たちが自分を追ってくる、という空想に悩まされる。この時、罰を与える女神にはルクレシアのイメージが重ねられている。リリーは自分を騙してレイプしようとしたガスに対して怒りを向けずに、自分自身にすべての責任があると感じる。

Over and over her the sea of humiliation broke – wave crashing on wave so close that the moral shame was one with the physical dread. It seemed to her that self-esteem would have made her invulnerable – that it was her own dishonour which put a fearful solitude about her. (Wharton [1990] p.116)

(何度も何度も、屈辱の波が彼女のうえで碎けた。波はすさまじい音を立て、彼女の近くで碎け散ったので、道徳的な恥辱が肉体的な恐怖とひ

とつになった。彼女には、自尊心が自分を不死身にしたであろうと思われたし、自分を恐ろしい孤独に追い込むのは、自分自身が名誉を失うときだと思われた。)

リリーにとっての真の恐怖の対象は、脅迫者のガス・トレナーではなく、自尊心や道徳心の崩壊であることがわかる。彼女は、ここでも、自分が二つの存在に分裂するのを感じている。

She seemed a stranger to herself, or rather there were two selves in her, the one she had always known, and a new abhorrent being to which it found itself chained. (Wharton [1990] p.117)

(彼女は、自分が自分でないように思われた、というよりは、むしろ、自分の中に二つの自己、彼女がいつも知っている自己と、その自己が鎖で縛り付けられているもう一つの新しく忌まわしい存在がいたのだ。)

自分のなかにある、容認しがたい部分は、もう一人の自分、という形で現れるが、次にリリーは復讐の女神に罰せられることを恐れる。

Yes, the Furies might sometimes asleep, but they were there, always there in the dark corners, and now they were awake and the iron clang of their wings was in her brain ... (Wharton [1990] p.117)

(そうだ、復讐の女神たちも時に眠るかもしれないが、でもそこにいる、いつも、その薄暗い隅々に潜んでいる。そして今その女神達は目覚め、その鉄の翼のぶつかる音が頭のなかで響いた。)

The winged furies were not prowling gossips who dropped in on each other for tea. But her fears seemed the uglier, thus shorn of their vagueness ... (Wharton [1990] p.134)

(翼のある復讐の女神たちは、互いに立ち寄ってお茶を飲み、噂話をあさり、歩いていた。しかし、彼女の恐怖心は、曖昧な部分を剥ぎ取られていっそう醜悪にみえた。)

復讐の女神には、上流社会の慣習への服従を強要する母親のイメージが重ねられていると同時に、母の価値観の強い否定や抵抗も反映されている。『フェミニズムと精神分析事典』において、「投影」は、「主体の自我が、自分の受け容れがたい衝動を誰か他の人のせいによって、そのような衝動との関わりを否認する」ことであり、そのような「耐え難い感情は、ある他者に由来するのだと感じられ、それ以降その他者は迫害者として現れる」とされている（ライト [2002] pp.268-270）。

内面化された母親は、潜在意識となって、娘の行動を逐一監視し、社会の慣習からの逸脱を妨げようとする。一方、娘は母親からの独立と、自己同一性の確立を目指し奮闘しているが、達成は容易ではない。さらに、自分自身の感情の機微が認識できないため、母親への拒否感を受け入れ、自らの意のままに行動することができない。自由を得ようとすればするほど、娘は母親への恐怖心を増長させてしまう。また同時に、否定的感情が投影され、復讐の女神、という形で回帰する。

ギリシャ神話のなかで、“Furies”は母親殺しを行った者に対する復讐者でもある。したがって、それはリリーの母親殺しという潜在的欲望に対する罪悪感の象徴であるともいえる。リリーが抱いた罪悪感、同じく母親に対する否定の感情をうまく処理できなかったウォートンの内面を反映しているのである。

7 母親の価値観の否定

ウォートンは上流階級の女性たちが、目にみえない形で暴力を行使し合い、同性間の権力闘争に明け暮れる様子を描いているが、*The House of Mirth*のなかで、男性中心社会の「装飾品」であるバーサ・ドーセットは、まさに、ルクレシアの価値観を体現する人物であるといえる。この章では、バーサとリリーの関係进行分析し、そのなかに母親の犠牲者としての娘の行動様式が反映されていることを明らかにしたい。

リリーとバーサについて、ウェイドは、二人はお互いに分身であり、それぞれの立場には互換性がある、と指摘する（Waid [1991] p.25）。フェドルコもウェイドと同様にバーサの役割を重視し、バーサはリリーの「引き立て役」

(foil)であると同時に「リリーの否定的な側面を表す分身」(dark possibility)である,と述べている(Fedorko [1995] p.37). リリーとバーサは,たとえばソースティン・ヴェブレンが『有閑階級の理論』(*The Theory of the Leisure Class*)の第7章「金銭的な文化の表現としての衣装」で述べているように,当時,上流階級の「装飾品」とみなされた女性像を体現している.ここで述べられている「装飾品」としての女性は,毎年パリから高価な衣装を取り寄せていたルクレシアを想起させる.伝記によるとルクレシアは社交界の花形で,上流階級の慣習の保持に大いに貢献した.ウォートンのテキストに「風刺」として描かれているように,当時の社交界の多くの女性たちは「装飾品」としての役割に甘んじ,個人的な感情を抑圧して男性中心の社会的な価値観に沿うことに疑問を抱いていなかった.

*A Backward Glance*で述べられている通り,ウォートンは幼少期より,母の美しさ,優雅さに魅了され,視覚的なイメージに圧倒されていた.その例としては,ウォートンが将来の職業を尋ねられ,ファッショナブルな女性になること,と答えたという逸話が紹介されている.しかし,ルクレシアの美しさは,リリーが体現する,純白の百合のような清らかな美とは異なり,不可解なイメージを伴っていた.たとえば,先に引用したリーは伝記のなかで,「ウォートンの母親には,なにか当惑させるものがあつた,神秘的な不可解さ,暗くて蝙蝠がたくさんいる,締め切られた部屋のようなものが」と指摘する(Le [2007] p.37).では,母に対する不可解な印象とは,どのような心理的背景から生まれたのだろうか.

リチャード・ホフスタッター (Richard Hofstadter) は,19世紀後半のアメリカ社会では,女性は男性よりも道徳心が強い存在として祭り上げられ,女性の社会的役割を限定されていた,と述べているが(Hofstadter [1962] pp.172-196),ウォートンは人々が物質主義的価値観に囚われていることや,さらに女性が周縁的役割に置かれていることを,もっとも身近な存在である母親を通して知った.そして,女性が単なる装飾物として扱われていることに疑問を感じ,自らの役割を顧みず,社会通念に盲従する女性たちに欺瞞を見ていたのではないだろうか.上流階級の子女として生まれた以上,表立って慣習に背くことが許されなかったウォートンは,自ら抱いた受け容れ難い感情を,不可解さとして,のちに表現したのである.

ウォートンは14才の頃に執筆した短編小説“Fast and Loose” (1876)において、すでに上流階級の風刺を始めていた。*The House of Mirth*のなかでバーサが象徴する典型的な上流階級の女性は、女性の存在そのものが周縁化され、ないがしろにされていることに気づかず、「歓楽の家」で束の間の遊戯を楽しむ哀れな存在である。以下の引用箇所はバーサの描写であるが、その姿はグロテスクで、ニューヨーク上流社会の物質主義的な価値観が生んだ亡霊を現しているようだ。美しいが不可解で、幽霊のように残像が意識に残る、という面で、ルクレシアの像はバーサに反映されているといえる。

She (Bertha) was smaller and thinner than Lily Bart, with a restless pliability of pose, as if she could have been crumpled up and run through a ring, like the sinuous draperies she affected. Her small pale face seemed the mere setting of a pair of dark exaggerated eyes, of which the visionary gaze contrasted curiously with her self-assertive tone and gestures; so that, as one of her friends observed, she was like a disembodied spirit who took up a great deal of room. (Wharton [1990] pp.21-22)

(彼女はリリーより背が低く、痩せていて、落ち着きのないうまくしゃとした物腰をしていた。まるで、彼女が好んで身につけるやわらかい優美な襷の布地のように、くしゃくしゃに丸めて輪の中を通せるようだった。顔色の冴えない小さな顔は、誇張した目元の単なる背景にすぎなかった。その目がじっと物を見据えると、我の強い調子や動作と奇妙な対照をみせ、引き立った。それで、彼女のことを友人のあるひとは、広い空間を占有する肉体から離脱した靈魂のようだ、と言った。)

8 バーサとリリーの対比

リリーはバーサと衝突しながらも、友人としての関係を続けていくが、バーサに対峙するリリーの姿は、支配的な母親と、自らを過剰に抑圧し、罰する娘の姿に重複する。リリーの価値観が揺らいでいる様子は、彼女が、作品中もっとも道徳心が強く自己犠牲的な人物であるガーティ・ファリッシュでは

なく、敢えて軽佻浮薄なバーサと親密になろうとしている部分にも顕著である。リリーはバーサによってパーシー・グライスとの婚約を妨害され、不利な噂を流されるなど、名誉棄損の被害に遭っているにも関わらず、共に行動する相手としては、社会福祉活動に熱心で、質素な暮らしをしているガーティよりも、社交界の花形のバーサを選ぶ。社交界の人間関係に息苦しさを感じながらも、母親から「歓楽」の世界の価値観を植えつけられたリリーは、表面的な美しさに彩られ、物質主義的な価値観が横行する虚飾の世界から距離を置くことができないのである。とはいえ、良心や道徳性を著しく欠くバーサと、リリーはコミュニケーションを成立させることができず、そればかりか、リリーはバーサに利用され、再起不能になるほど社交界で不利な立場に追い込まれる。リリーが物質的価値観と精神的価値観を両立させようと努力しても、「歓楽の家」の世界では、モラルよりも富と権力の所持者が圧倒的に有利なのだ。美と道徳性を備えたリリーが、最終的に死に追い込まれる姿は、ウォートン自身がオールド・ニューヨークの排他的な世界で受けた心の傷の大きさを示す究極の表現ともなっている。

先の引用部分に描かれているように、バーサは社交界のモラルの低さを象徴する人物であるが、ここで注目すべきことは、そのような邪悪な人物に対するリリーの対応の仕方である。先にリリーがガス・トレナーの脅迫に対峙した際、相手を恨まずに自らを戒めている点を指摘したが、リリーはバーサに対しても、驚くほど寛大な態度を取っている。

たとえば、ドーセット夫妻のモンテカルロへの航海に同行したリリーは、旅行の途中、公衆の面前で突然バーサから侮辱を受け、下船を命ぜられる。以下の引用箇所は、船から追い払われる直前の場面で、リリーは自分に不当な扱いをするバーサに対して憐れみの感情を抱き、寛大な態度をみせようと努力する。一方、バーサは不可解な笑みを浮かべるのみで、相手を受け入れない。

[…], with such a doom impending, why waste time in these childish efforts to avert it? The puerility of the attempt disarmed Lily's indignation: did it not prove how horribly the poor creature was frightened? (Wharton [1990] p.162)

(そのような悲運が差し迫っているのに、なぜそれを避けようと、こんな子供っぽい努力をして時間を無駄にするのだろうか？その試みの幼稚さに、リリーの憤りが和らいだ。それは、可愛そうに、彼女がものすごく怯えている証拠ではないのか。)

A chill of fear passed over Miss Bart: a sense of remembered treachery that was like the gleam of a knife in the dusk. But compassion, in a moment, got the better of her instinctive recoil. [...] It was on Lily's lips to exclaim: "You poor soul, don't double and turn – come straight back to me, and we'll find a way out!" But the words died under the impenetrable insolence of Bertha's smile. (Wharton [1990] p.162)

(ひやっとする恐ろしい肌寒さが、ミス・バートを通り過ぎた。闇に光るナイフのように、思い出された裏切りの感覚。しかし、たちまち憐れみが、畏縮本能に打ち勝った。(…)リリーの唇に叫び声があがった。「かわいそうに、追っ手をまくために逆行したり、曲がったりしないで、まっすぐ私のところに戻りなさい、そうすれば出口が見つかるでしょう」しかしこの言葉はバーサの不可解で横柄な笑いのもとに消えた。)

ここでウォートンは同情心が強く寛大なリリーと、欲望の赴くままに行動し、そのためには他者を利用することをも辞さない、邪悪な人物のバーサを対照的に描くことで、リリーの子供のような無邪気さと、道徳性の高さを強調している。

先に、ミラーを引用し、情動上不安定な母親の子供は他の人間の発する無意識の欲求信号に敏感に反応する感覚を作り上げる、と述べたが、バーサに対するリリーの敏感な反応や、適応しようとする努力は、ウォートンの自伝的要素が無意識的に反映されたものである。ガスやバーサのような自己中心的な人物からの理不尽な要求に対しても、リリーは不快感を表す前に、可能な範囲で応じようとする。これは自己犠牲をもってしかコミュニケーションを図れない、幼少期に心の傷を負った人間に特有の反応に通じるものがあり、ここにも作者自身の実体験が反映されているように思われる。

9 結論——「悲しむ」能力の獲得と自己の解放

ジョアン・リドフ (Joan Lidoff) は、*The House of Mirth* には本当の意味での他者が不在で、人との交流がなく、疎外が必然的であると指摘する (Lidoff [2003] p.184). Book II の13章でリリーが睡眠薬クロラルによって永遠の眠りにつく前に、夢うつつの状態に陥り、ネッティ・ストラウザーの赤ん坊を胸に抱く夢を見る場面は、これまでも様々な解釈を生んできた。しかし、その場面がリリーの孤独感を強調していて、ウォートン自身の子供時代の感情の無意識の表出であることは、あまり注目されていない。

エレーヌ・ショーウォーター (Elaine Showalter) は “The Death of the Lady (Novelist): Wharton’s *House of Mirth*” における論考で、「リリーの苦境は、ニューヨーク社交界の優雅な記録者、風俗と装飾の作家としてのウォートンの生涯と類似している」という。さらにショーウォーターは、次のように述べている。

We are repeatedly reminded of the absence of this language in the world of *The House of Mirth* by Lily’s ladylike self-silencing, her inability to rise above the ‘word-play and evasion’ that restrict her conversations with Selden and to tell her own story. Lily’s inability to speak for herself is a muteness that Wharton associated with her own social background, a decorum of self-restraint she had to overcome in order to become a novelist. (Showalter [1991] p.88)

(『歓楽の家』では、リリーの貴婦人らしい自己抑制、セルデンとの会話を狭いものにしていく「言葉遊びと言い逃れ」を乗り越え自分自身を語ることができないという、言語の欠如が繰り返し示されている。リリーが自分について語れないことは、ウォートンが自分自身の社会的背景と結び付けている寡黙さ、自己抑制の作法であり、作家になるために彼女はそれを克服しなくてはならなかった。)

リリーの深い孤独の陰には、幼少期に実母から放棄された経験があり、ウォートン自身が克服できずにいた悲しみを読み取ることができる。

[...] She herself had grown up without any one spot of earth being dearer to her than another: there was no centre of early pieties, of grave endearing traditions, to which her heart could revert and from which it could draw strength for itself and tenderness for others. (Wharton [1990] p.248)

(彼女自身、大人になるまで、何よりも大切だと思う地球上の居場所を、まったく持ったことがなかった。子供の頃からの信心や、親近感をもった厳かな伝統などの、彼女の心が立ち戻ることができ、自分のために力を、他人には優しい思いやりを、引き出せるような中心はなかった。)

It was no longer, however, from the vision of material poverty that she turned with the greatest shrinking. She had a sense of deeper impoverishment – of an inner destitution compared to which outward conditions dwindled into insignificance. It was indeed miserable to be poor [...] . But there was something more miserable still – it was the clutch of solitude at her heart, the sense of being swept like a stray uprooted growth down the heedless current of the years. (Wharton [1990] p.248, 下線部筆者)

(リリーが何よりもひるんで顔を背けたのは、もはや、物質的貧困の幻影ではなかった。彼女にはもっと深い不毛感があった——外面の状況がだんだん振るわなくなるにしたがって生じる、内面の欠乏感覚だ。貧乏は本当に惨めだ——。しかし、貧乏よりずっと惨めなものがあった——それは心に巣くっている根深い孤独感だった。さらに、後ろを振り向けば自分には人生と本当に関わったときがなかったことに気がついた。)

繰り返し述べているように、リリーは自分自身の感情と向き合うことができないために他者に過敏に反応し、自滅的な行動をとってしまう。リリーは不幸な結末を迎えるが、一方で、このようにして小説の主人公を葬った作者自身は、*The House of Mirth* での文学的成功をきっかけに、自身の不幸な過去を断ち切ることができた、と言えるだろう。

ミラーは、自分自身の真実を体験し、多重な意味をもつものと知覚できれ

ば、自分の感情世界に回帰でき、そうすることで「悲しむ能力」が獲得できる、そして、その能力が生きる力を回復させてくれる、と述べている（ミラー [1996] p.22）。本稿の冒頭で、リーとウルフが、リリーの孤独と悲惨な死を、ウォートンの無意識の反映とみなしている、と言及したが、ウォートンは自らをデフォルメしたような人物であるリリーを創造し、その生と死を描きながら、自らの幼少期の悲しみと初めて対峙したのではないだろうか。ミラーは「どのような人のなかにも、多かれ少なかれ、自分自身にもわからない隠れた小部屋があり、そのなかにその人の子供時代のドラマの遺物がしまわれている」と述べているが（ミラー [1996] p.40）、この小部屋の比喩は、ウォートンの初期の短編 “The Fullness of Life”（1893）のなかの次の箇所と共通している。

I have sometimes thought that a woman's nature is like a great house full of rooms: there is the hall, through which everyone receives formal visits; the sitting room, where the members of the family come and go as they list; but far beyond, are other rooms, the handles of whose doors perhaps are never turned; no one knows the way to them, no one knows whither they lead; and in the innermost room, the holy of holies, the soul sits alone. (Wharton [2007] p.38)

（私は時々こう考えるんです。女性の性格は、部屋が沢山ある、大きなお屋敷みたいなものだ。そこには形式上の訪問を受ける広間があり、家族のメンバーが集うリビングルームがあるけれど、そのずっと奥には他の沢山の部屋があるのです。そして、部屋のドアの取手は、決して触れられることはありません。ドアへ至る道は誰も知らないし、ドアがどこに通じているのか、誰にもわかりません。そして、一番奥の部屋には、もっとも神聖な魂が、たった一人で座っているのです。）

この短編の発表から12年後に *The House of Mirth* が出版されたが、ウォートンはタイトルに “House” を使用することで、家族関係や社交界がもたらす閉塞感を表現している。ウォートンは、母が娘に伝達する「女らしさ」のイメージが大きな影響力をもち、ジェンダーの問題として、ときに精神的外傷を与えることをわれわれに伝えている。

参考文献

- 西澤哲 [1997] 『子供のトラウマ』講談社.
- フロイト, ジークモント 竹田青嗣編 中山元訳 [1996] 『自我論集』筑摩書房.
- ミラー, アリス 山下公子訳 [1996] 『才能ある子のドラマ: 真の自己を求めて』新曜社.
- ライト, エリザベス編 岡崎宏樹ほか訳 [2002] 『フェミニズムと精神分析事典』多賀出版.
- ラブランシュ／ボンタリス 村上仁監訳 [1977] 『精神分析用語辞典』みすず書房.
- Benstock, S. [1994] *No Gift From Chance: A Biography of Edith Wharton*. New York: Charles Scribner's & Sons.
- Eichenbaum, L and Orbach, S. [1983] *Understanding Women: A Feminist Psychoanalytic Approach*. New York: Basic Books.
- Erlich, C. G. [1992] *The Sexual Education of Edith Wharton*. Berkeley: University of California Press.
- Fedorko, K. A. [1995] *Gender and the Gothic in the Fiction of Edith Wharton*. Tuscaloosa and London: The University of Alabama Press.
- Gilbert, S. M., and Guber, S. [1979] *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP.
- Hofstadter, R. [1962] *Anti-Intellectualism in American Life*. New York: Vintage Books.
- Lee, H. [2001] *Edith Wharton*. London: Chatto & Windus.
- Lidoff, J. [2003] "Another Sleeping Beauty: Narcissism in *The House of Mirth*." *The House of Mirth: A Casebook*. Ed. Carol J. Singley. Oxford: Oxford UP.
- Louis, R. B. [1985] *Edith Wharton: A Biography*. New York: Fromm International.
- Showalter, E. [1991] "The Death of the Lady (Novelist): Wharton's House of Mirth." *Sister's Choice: Tradition and Change in American Women's Writing*. Oxford: Clarendon Press.
- Sullivan, E. R. [1994] "The Daughter's Dilemma: Psychoanalytic Interpretation and Edith Wharton's *The House of Mirth*." *The House of Mirth*. Ed. Shari Benstock. Boston: Bedford / St. Martin's.
- Veblen, Thorstein. [1994] *The Theory of the Leisure Class*. New York: Dover Publications, INC., .
- Waid, C. [1991] *Edith Wharton's Letters From the Underworld: Fictions of Women and Writing*. Chapel Hill and London: The University of North Carolina Press.
- Wharton, E. [1990] *The House of Mirth*. Ed. Elizabeth Ammons. New York: W.W.Norton & Company.
- . [1998] *A Backward Glance: An Autobiography*. New York: Touchstone.
- . [2007] *The Early Short Fiction of Edith Wharton – Part II*. Gloucestershire: Do Do Press.
- Wolff, C. G. [1995] *A Feast of Words: The Triumph of Edith Wharton*. 2nd ed. Reading: Addison-Wesley Publishing Company.